高齢化社会に向けた観光活性化を考える
～明日香村観光調査からの考察～

西田　純二[1]・福井　正浩[2]・後藤　正明[3]・小林　潔司[4]

[1]正会員　京都大学経営管理大学院/㈱社会システム総合研究所（〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-10-27）
E-mail:nishida@jriss.jp
[2]奈良県明日香村（〒634-0111 奈良県高市郡明日香村大字岡55番地）
E-mail: masahiro_fukui@tobutori-asuka.jp
[3]正会員　㈱シティプランニング（〒600-8431 京都市下京区綾小路通新町東入善長寺町143）
E-mail: goto-cp@par.odn.ne.jp
[4]フェロー会員　京都大学経営管理大学院（〒606-8501 京都市左京区吉田本町）
E-mail: kkoba@psa.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

京都大学経営管理大学院では奈良県明日香村と観光を軸とした地域活性化・地域経営に関する協力協定を締結し活動を行っている．

この一環として平成24年度には国土交通省の委託事業である「ユニバーサル社会に対応した歩行者移動支援システムに関する現地事業」を実施した．また明日香村の観光客の現況を捉えるために詳細な観光実態調査を行った．これらの結果，明日香村観光の特徴は「中高年観光客が来訪者の過半数を占め，お金を使わず，景観・自然を楽しむことを目的に来訪し，その多くは多頻度リピータである」ことが明らかになった．これは我が国の多くの地域で増えつつある代表的な観光形態であると考えられる．本論文では明日香地区観光客の行動分析の結果を紹介し，今後我が国の多くの観光地の共通課題となる高齢化社会に向けた観光活性化の方策について考察する．

Key Words : *Tourism, Transportation, Aging Society, Traffic survey*

1.　はじめに

我が国は，高齢化率，高齢化の速度，平均寿命，平均年齢のいずれを見ても世界に類を見ない「高齢化社会」を迎えた．高齢化の進展は社会や経済の構造に大きな影響を与えているが，観光においても例外ではない．

地域活性化のための観光の重要性はいうまでもなく，2012年3月には「観光立国推進基本計画」[1)]が閣議決定され，日本再生の基本戦略の一つとして“観光”振興の重要性が示されている．

しかし観光立国推進基本計画や，観光活性化を掲げる多くの地域の取り組み[2)]の内容を見ると，高齢化社会に対応した地域観光戦略の多くは，施設のバリアフリー化やユニバーサルデザインの推進など，高齢者の移動を支援する施策に重点が置かれている．

果たして，それで十分だろうか？　我が国の高齢化率は2011年には23.3%となり，国民のほぼ4人に1人が高齢者となった．これに対して年少人口率は13.1%となり，高齢者の約半分程度にまで減少している．

既に「観光地の高齢者対策」，という表現は誤解を生む可能性すらあり，高齢者は地域計画を考えるにあたってのマイノリティではなく，年少者がむしろマイノリティとなっているのである．

このことを明日香村の例を引いて説明すれば，私が中学生であった昭和40年代には，明日香村は遠足や修学旅行の児童・学生で溢れていた．子供連れの家族がハイキングを兼ねて地域を散策する姿が代表的な観光形態であった．しかし最近は，春秋の遠足シーズンには子供の姿が見受けられるとは言え，その季節を除けば中高年の観光客ばかりが目にとまるようになっている．

早朝から高級な一眼レフと交換レンズの詰まったバッグを持って，農道や里山に分け入り，撮影に専念している観光客が増加している．道端の石像や，朝日に映える大和三山の写真を撮るために，早朝から三脚を据えて撮影ポイントを巡る．歌の会のグループが先生に案内されながら万葉集の歌枕の地を巡り自然を愛でる．歴史書を片手に天皇陵に詣でる．

このような観光形態はここ最近顕著になってきたものであり，地域計画の際も，高齢化により急速に変化する観光客の実態を正確に把握しておく必要がある．

今後，我が国のさまざまな地域の活性化計画の中に，観光施策はより大きく位置づけられるようになる[3]だろう．この時，増加傾向にある高齢者の観光行動の特性を十分に意識して計画づくりを進めることが重要である．

明日香村では，高齢化社会に向けた観光活性化を考えるにあたり，京都大学経営管理大学院の協力のもとに，地域の観光実態調査を行い，併せて地域の交通サービスや歩行空間，主要施設について，バリアフリーの視点から総点検を行った．

本論文ではこれら実態調査の結果を報告し，そこから読み取れる明日香村の観光活性化に向けた課題と提言を紹介する．

2. 明日香村の概要と明日香法

(1) 明日香村の位置

奈良県明日香村は，図１のとおり奈良県の中央付近に位置し，総面積24㎢，大阪市から約40km，奈良市から25kmに位置している．大阪・京都の都心から電車で45分～１時間ほどの時間距離にある．人口は約6300人，世帯数は約1800世帯である．

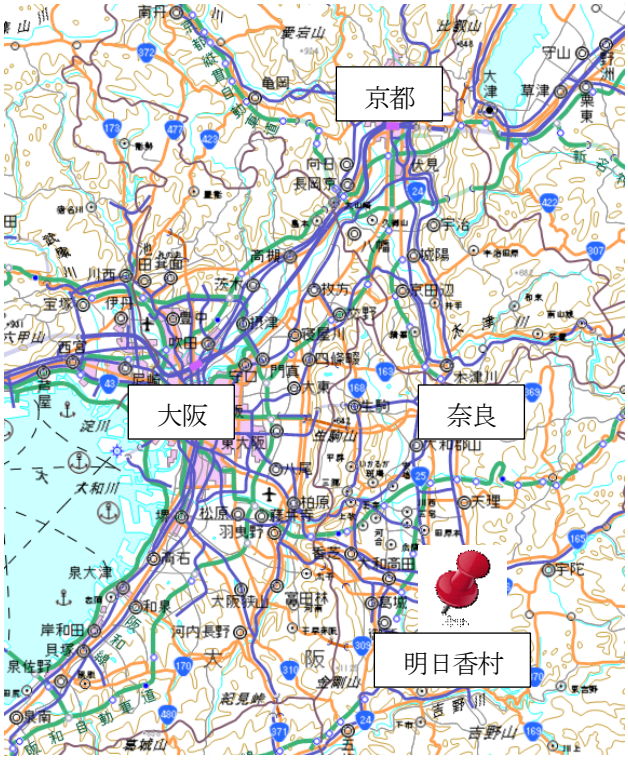


図１　明日香村の位置

(2) 明日香法

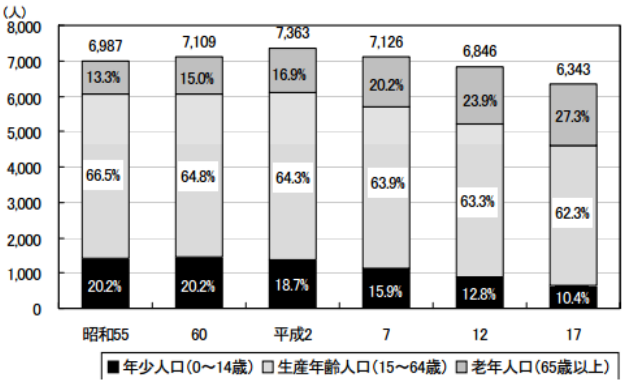
明日香は我が国の律令国家体制が初めて形成された時代における政治及び文化の中心的な地域であり，日本の始まりの地として多くの歴史文化遺産を継承している．さらにその価値は国内だけではなく，世界的にも有数の文化資産の集積地であることから，明日香村ではユネスコ世界遺産の登録に向けて活動を進めている．

しかし明日香村は大阪都心から１時間圏にあることから，1960～70年代の高度経済成長期には明日香村付近にまで住宅開発の波が押し寄せた．一方，明日香村の主要な産業である農林業は零細化と後継者不足などで苦況に立たされていたため，明日香の原風景である自然や田園風景は宅地化の急速な進展により大きく損なわれる可能性があった．そこで1980年に「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法」（通称：明日香法）が公布・施行された．明日香村は村全域が古都保存法の特別地区の指定を受け，貴重な歴史的風土の保存と住民生活の安定及び産業振興との調和を図るために特別の措置が講じられることとなった[3]．

(3) 明日香村と地域振興の課題，観光活性化

前述のとおり明日香村は全村が古都保存法の特別地区に指定され，地域の開発は厳しく抑制されている．

図２に示すように，明日香村の人口は平成７年をピークに減少に転じており，その減少速度は周辺の市町村を上回る勢いである．明日香村における歴史的風土の保存の重要性は言うまでもないが，地域の産業基盤の維持・拡大と活性化をどのように維持していくべきか．



出典:国土交通省資料「明日香村の現況について」

図２　明日香村の人口推移

トレードオフとも言える開発抑制と地域活性化という課題に対応するため，明日香村では観光活性化は特に重要な施策として位置付けられることとなった．

(4) 明日香まるごと博物館構想

明日香村で進めようとしている「明日香まるごと博物館構想」は，村全体をあたかも屋根のない一つの博物館のようにみなし，村内の文化財や美しい景観，豊かな自然，安全でおいしい農産物，そこに暮らす人々の多様な活動など村の全ての魅力を活かして，訪れる人をもてなす村づくりを目指そうという計画である．

古都保存法，中でも第１種歴史的風土保存地区に指定

されているエリアでは，建築物はもちろん，街路灯や電柱すら建設には大きな制限を受ける．史跡の案内を行う看板類も最小限に規制される．そこで明日香村では村域をまるごと博物館として機能させるために，「あすかナビ」の構築を行った．あすかナビは国土交通省の委託事業である「ユニバーサル社会に対応した歩行者移動支援システムに関する現地事業」により構築したもので，村内の文化財や観光施設の詳しい解説とともに，バリアフリー道案内を行うものである．

3. 明日香村観光の実態

(1) 観光実態調査の目的と概要

明日香村では全村を対象とする本格的な観光実態調査は行われていなかった．明日香村の観光客数は，入場者が計数されている有料施設の入場者数の単純合計値として推計され，年間約80万人という観光客数を算出していた．しかしこの方法では複数の施設を同時に来訪する観光客が重複計上される一方，有料施設を利用せずに村内を周遊する観光客の数が含まれないなどの問題がある．

そこで，明日香村の観光客の質・量を正確に把握するため，下記のような観光実態調査を実施[4]した．

1. 実施日時　2012年9月
2. 調査内容
   1) 主要施設の来訪者数カウント調査
   2) 公共交通の利用者数カウント調査
   3) 駐車場のナンバープレート調査
   4) 来訪者へのアンケート調査
   5) GPS移動経路調査
   6) 交通量カウント調査

以下に観光実態調査の結果から特徴的な点に焦点をあて紹介する．

(2) 中高齢者の利用と高いリピート率

観光実態調査によれば，図３に示すとおり明日香への来訪者の過半数は50代以上の中高齢者となっている．これに対して10代，20代の来訪者は極めて少なく15%に満たない．

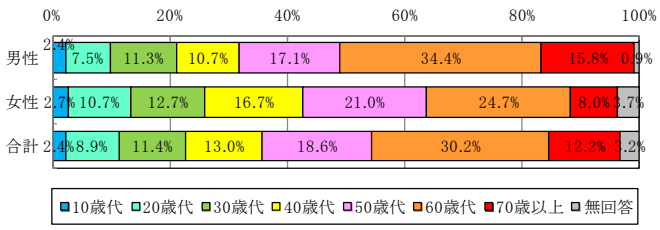


図３　性年齢別の来訪者割合

特に，図４に示すように，中高年のリピーターの占める割合が高いことが明らかとなった．

一昔前には，小中高校の遠足・修学旅行が観光客の中心であったことを考えれば，観光客の様相は大きく変化している．少子高齢化が大きな影響を与えていることがわかる．さらに50歳代の28%，60代の36%，70代の42%は11回以上の多頻度リピーターである．年代が上がるにつれて来訪回数が増えるのは当然とは言え，リピータの割合は，明日香村関係者の想像をはるかに上回る高さであった．

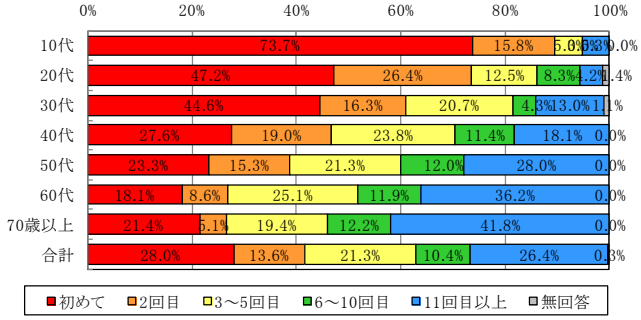


図４　年代別の来訪回数

(3) 団体ではなく少人数で来訪

リピーターが多い地域では，少人数での来訪形態が中心になる．実態調査の結果を見ても，団体旅行ではなく１人または2～3人での来訪が主体となっている．学校や地域・職場での団体旅行は少数である．

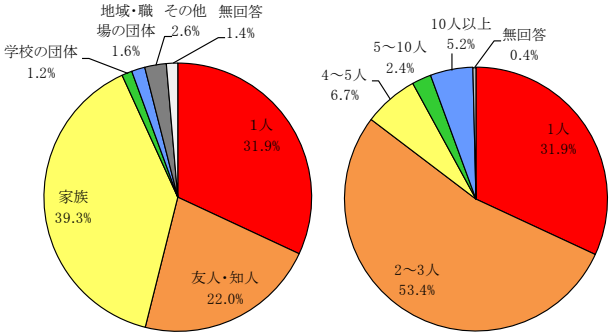


図５　来訪者の人数・グループ構成

(4) 一人旅は鉄道，グループでは自家用車

一人旅では鉄道の利用が多いが，人数が増えるにしたがって自家用車の利用が増加するのだが，５～10人のグループになると自家用車の利用が減り，鉄道を利用している．10人以上の団体では観光バスを利用する．

総数で見ると，鉄道と自家用車が同程度の割合で利用されている．

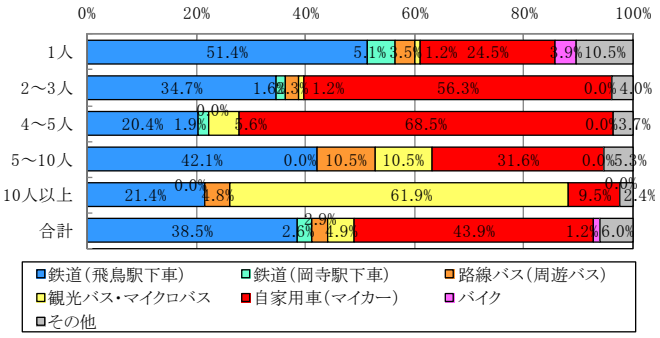


図６　来訪者の人数別の利用交通手段

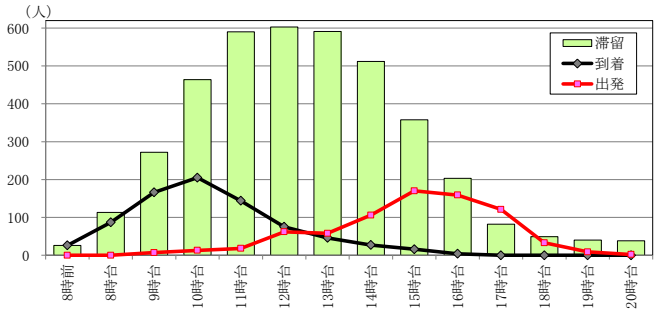


図９　村内への滞留者の時間分布

(5)　近郊からの日帰り来訪者が中心

明日香村への観光客の80%は近畿圏からの来訪者であり，奈良県・大阪府からの来訪者だけでも60%を占める．また宿泊客の割合は12%で日帰り客が87%を占めている．近郊からの日帰り客が魅力を感じる施策の充実が望まれる一方，著名な観光地であることに比較して宿泊客の割合が低いことから，宿泊機能の強化も必要であろう．

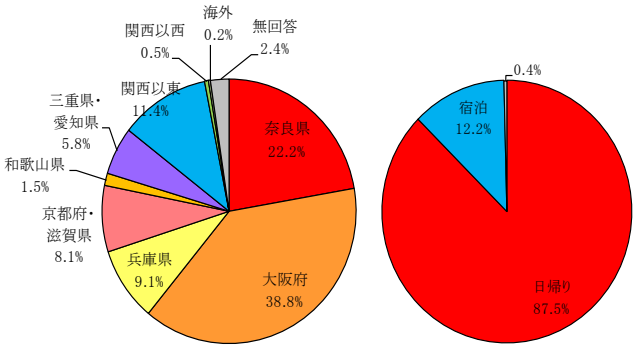


図７　来訪者の居住地と日帰り・宿泊

(6)　昼食時間を挟む３～６時間の滞在

明日香観光の87.5%は日帰りだが，一般的な日帰り型観光地と比較すると滞在時間は長い．滞在時間は正午を挟んだ３～６時間の滞在が過半数を占め，村内での滞留のピークは11時から13時台となっている．

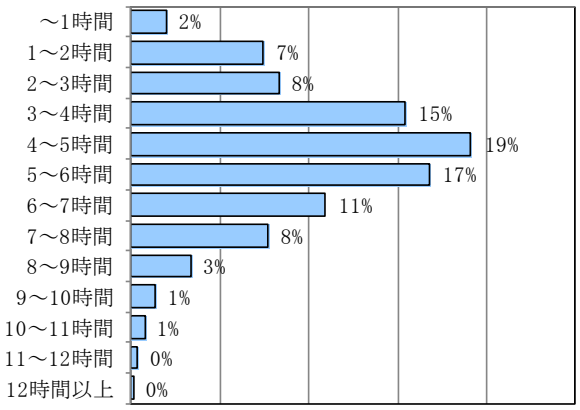


図８　明日香村観光の滞在時間の分布

(7)　周遊は徒歩とレンタサイクル，高齢者はバス

来訪者の70%から90%は，明日香に到着した後，徒歩かレンタサイクルで移動している．レンタサイクルは明日香観光の主要な交通手段となっているが，年代が上がるにつれて利用率は低くなる．特に70歳以上になるとレンタサイクルの利用が激減し，これに代わって周遊バス（かめバス）の利用が増える．今後，観光客の高齢化はさらに進むと考えられ，高齢者が使いやすい域内交通サービスの充実が求められる．

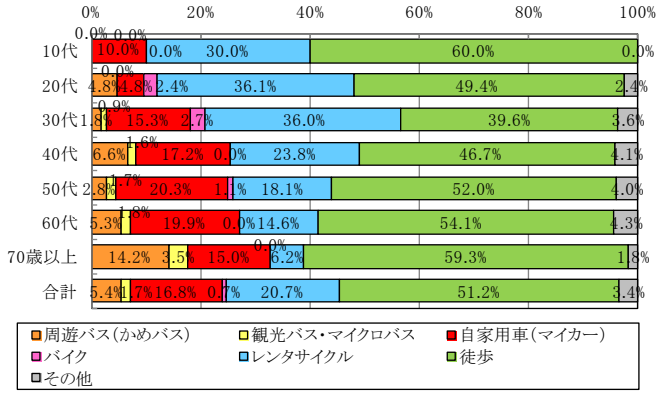


図 10　年代別の利用交通手段

(8)　石舞台古墳を訪問してから周辺を回遊

明日香観光客の訪問箇所では，石舞台地区が71.6%と圧倒的に多数を占める．後述するGPSによる移動履歴調査でも，石舞台を中心に高松塚，橘寺，飛鳥寺といった地区を回遊するルートが多い．

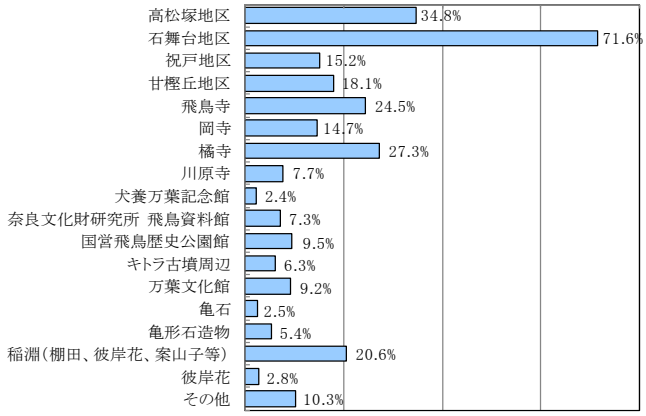


図 11　明日香村観光の訪問先

明日香村観光客の過半数が複数回のリピータであることを考えれば，リピータにとっても石舞台周辺は魅力ある目的地となっている．図12のGPS軌跡調査を見ても，観光客は石舞台へ到着後，明日香村全域に分散している．

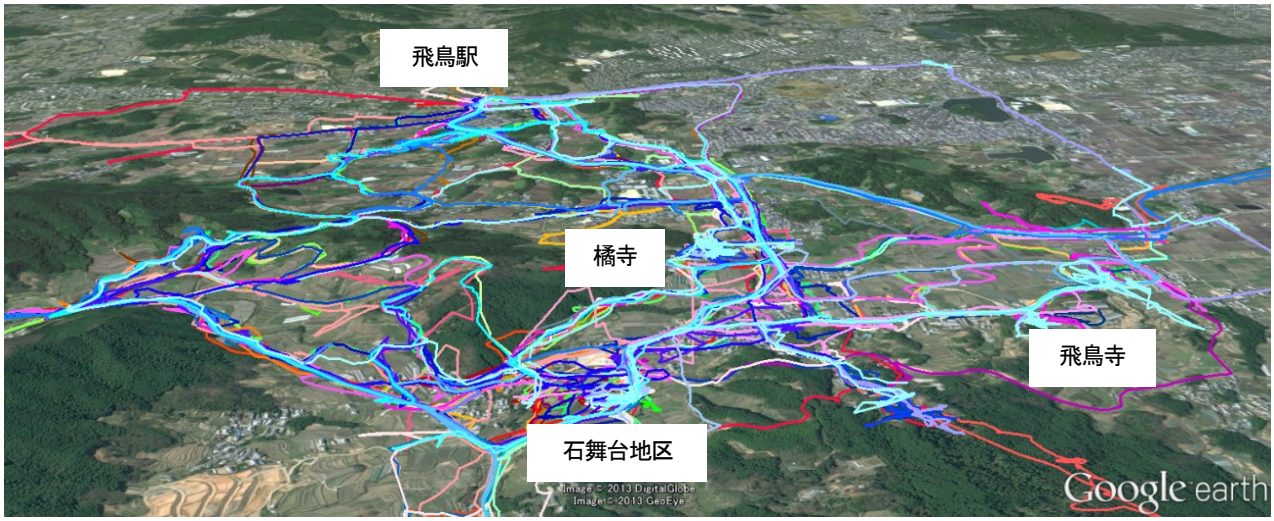


図 12　GPS 移動軌跡調査による観光客の回遊ルート

(9)　リピータには農村風景や緑の景観が魅力

明日香・飛鳥のイメージについての調査結果は極めて興味深い．10代，20代の若年層は明日香に対して古代史・寺社・古墳といった学校の歴史教育で学ぶ史跡や文化財のイメージを強く持っている．これに対して年代が高いほど，そして来訪回数が増えるほど，農村風景や緑豊かな景観を飛鳥のイメージとして選択する割合が高くなる．現在明日香村には，資料館や博物館といった学習型施設が多く立地しており，寺社や遺跡などの文化財も多い．しかしリピート回数が増えるに従って，これら拠点型・学習型の施設よりも，明日香地域全体が醸し出す農村風景や自然景観を魅力に感じて訪れる観光客が多くなってくる．

多頻度のリピーターは文化財や博物館等の施設訪問を卒業した後，地域を徒歩やレンタサイクル巡り，明日香の景観や環境・雰囲気を評価しているのだろう．今後の観光施策を考えるうえで大切な着目点だと考える．

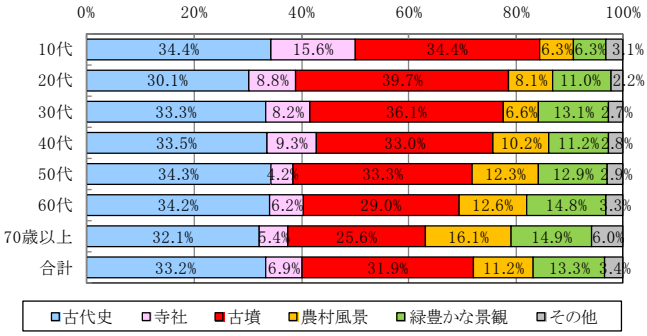


図 13　年代別の明日香のイメージ

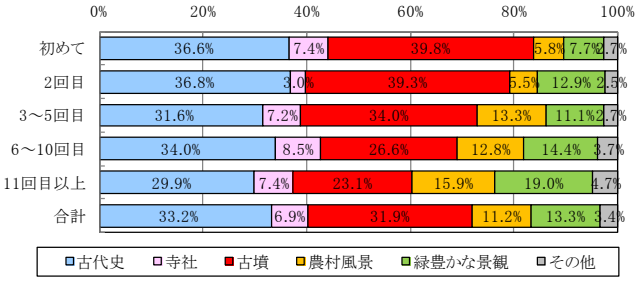


図 14　来訪回数別の明日香のイメージ

(10)　有料施設には入場せず地域を回遊

GPS移動軌跡調査によって，観光客の移動経路や各地区での滞在時間，施設への入場の有無を正確に把握できる．GPSログから移動経路や滞在時間を分析し，石舞台と高松塚を対象に，各地区を訪問した人数の中で有料区域に入場した人数をカウントした．

この結果を表１に示す．石舞台古墳周辺を来訪したGPS調査対象者35人のうち，有料区域に入場した人は19人（54%）であった．同様に有料の高松塚壁画館については，高松塚周辺に来訪した調査対象者15人のうち，壁画館には1人（7%）が入場しただけであった．リピーターが増加するにつれ有料施設への入場割合は低下する．

表１　有料施設へ入場した人の割合

石舞台古墳入場	19	54%
入場せず休憩所利用	7	20%
入場せず古墳周辺を周遊	5	14%
入場せずバス停を利用	4	11%
合計	35	100%

高松塚壁画館入場	1	7%
歴史公園の高松塚周辺を回遊	14	93%
合計	15	100%

村内の施設ごとに滞在時間を計測したところ，祝戸や稲渕のように地区内をゆっくり巡りながら自然景観を楽しめるエリアでの滞在時間は長いが，文化館，博物館，古墳や史跡などの拠点型施設での滞在時間は短く，数分から20分程度であった．

滞在時間が短い施設はリピート客が再訪したいと思う施設とはならないことが多い．リピータが増加するにつれ，拠点観光型ではなく，地域内循環型・回遊型の観光行動が主体となる．

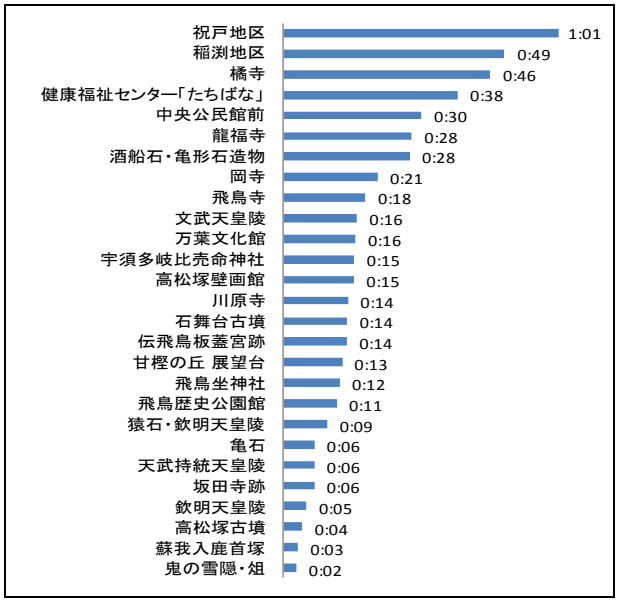


図 15　地区・施設での平均滞在時間

(11)　お金を使わずに周遊

明日香観光における金銭支出額を問うアンケート項目への回答では，土産代の支出・入場料の支出が500円未満と回答している割合は60%以上となっている．飲食代支出では500円未満が35%を占め，村内で食事をした場合は1000円～1500円の支出割合が高くなっている．

交通費・宿泊費を含めた明日香観光全体での支出額は，2000円～4000円が多く，次いで4000円～6000円が多い．明日香村への交通費が大阪からの往復で2000円程度の金額となることを考えれば，村内での支出額は合計で2000円以下となる．

明日香観光客の典型的な形として，有料施設にはあまり入場せず，土産物はあまり買わず，時々は村内で少し豪華なランチを楽しむ，という姿が読み取れる．

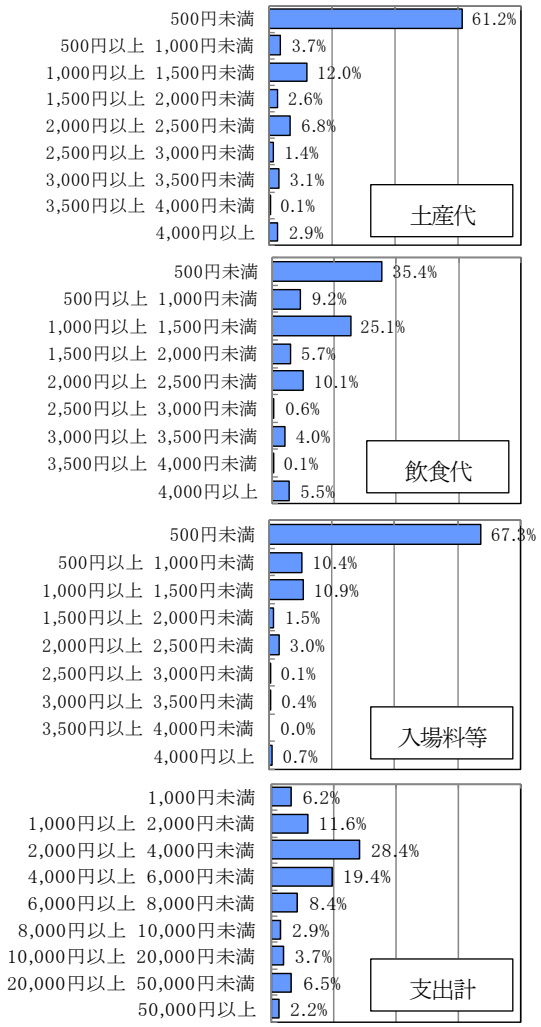


図 16　明日香観光における金銭支出

(12)　観光客の要望は食事・休憩施設・共通入場券

来訪者が明日香観光に期待することを質問した．

１位は食事・休憩施設であり，２位は施設・寺社への共通入場券となっている．駐車場や周遊バス・レンタサイクルの共通利用券を求める声も多い．

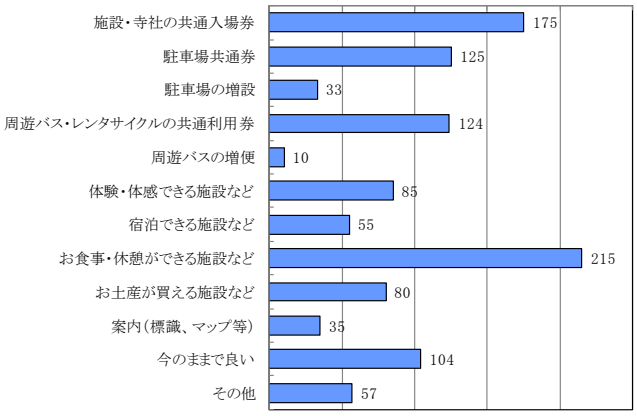


図 17　明日香観光に関する今後の要望

明日香村観光において食事の支出額が低いことは，食事・休憩施設の要望が多いことと関係しているだろう．有料施設への入場割合が低いことは，共通入場券などのリピーター・ニーズに対応するサービスが不十分であると読み取ることができる．

なお，この中で着目したいのは，「今のままで良い」という回答が第５位となっていることである．「明日香を俗化させないで」「便利でなくても静かな明日香，自然のままの明日香を残して欲しい」といった来訪者の気持ちが表現されているのではないだろうか．

4. バリアフリー実態調査

(1) 調査の概要

明日香村では，「平成24年度奈良県（明日香村地区）ユニバーサル社会に対応した歩行者移動支援に関する現地事業」の適用を受けて，バリアフリー経路案内，歩行者移動支援システムの構築を図るため，村内の歩行空間や主要施設に関するバリアフリー実態調査[5)]を実施した．

調査の実施日時と調査内容は下記のとおりである．調査対象の施設数は270にも及ぶ大規模な調査となった．

1. 実施日時　2012年8月
2. 調査内容
   1) 歩道等の歩行空間の幅員・勾配等
   2) 施設のサービス概要・バリアフリー対応

(2) 歩道等の歩行空間の現況調査

飛鳥駅から主要な文化財・観光施設が立地するエリアを中心に，観光客が利用する道路・歩道・公園内園路等の歩行空間を踏査した．調査した歩行路の距離は53.5km となり，この調査結果を歩行空間ネットワークモデル（リンク1205，ノード1377）として整備した．

調査を行ったデータ項目は下記のとおりで，国土交通省が定める「歩行空間ネットワークデータ整備仕様案（平成22年9月）」に沿って調査した．

●リンクデータ作成項目（箇所数：1205）
リンクID，起点ノードID，終点ノードID，経路の種類，方向性，通行制限，有効幅員，縦断勾配，横断勾配，路面状況，段差，階段段数，手すり，屋根の有無，蓋の無い側溝・水路の有無，バス停の有無，視覚障がい者用ブロック，主な利用者，リンク延長，場所情報コード

●ノードデータ作成項目（箇所数：1377）
ノードID，緯度，経度，接続リンクID

この整備仕様案に従って調査を行ったが，作業負担が過大で対象地区を絞らざるを得なかった．本仕様案とデータ整備方法は現在，国土交通省が見直しを進めている．

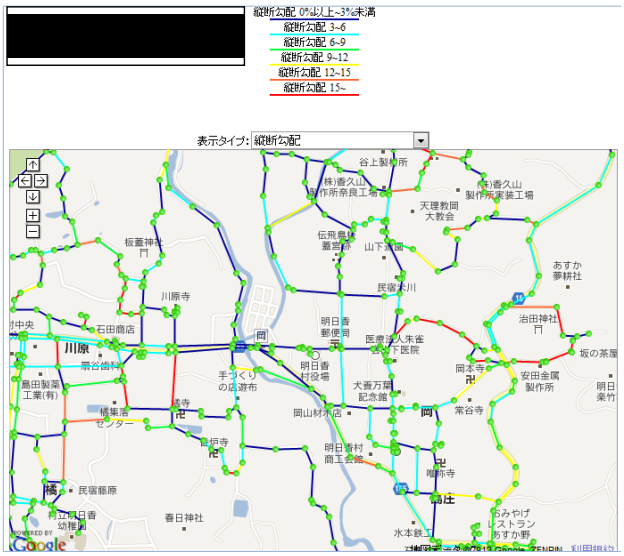


図 18　歩行空間の調査と図化の例

(3) 施設のサービス概要・バリアフリー対応調査

地区内の観光において利用する施設270箇所を選定し，各施設のサービスの内容やバリアフリー対応状況について実態調査を行った．

調査対象施設は，観・感・泊・食・買・助・巡の７つのカテゴリーに分類しリストアップした．施設の細カテゴリーと調査対象施設数は表２に示すとおりである．

表２　調査対象施設の分類と箇所数

大分類	含まれる施設等の細カテゴリー
観	寺院・寺社（14）　陵・古墳(17) 遺跡(6)　宮跡(3)　石造物(9) 施設・資料館など(6) 国営飛鳥歴史公園(4)　その他(0)
感	体験施設(14)　イベント・行事(5)
泊	民宿(9)　ペンション等(6)
食	喫茶(21)　食事(28)
買	土産物店(12)
助	トイレ情報(17)　休憩所(13)　病院(2) 公共施設(13)　コンビニ(2) 避難所(5)　雨宿りポイント(17) 通行注意箇所(26)
巡	駅(4)　バス停(11) レンタサイクル(11)　タクシー(1)

表２のすべての施設について，表３に示すバリアフリー対応項目についての実態調査を行った．バリアフリー対応項目については，事前に観光協会や明日香村の関係団体との協議を行い，高齢者から問い合わせの多い洋式・和式トイレなどの項目を加えた．また雨宿りができる場所や，自由に休憩ができるベンチなどの情報を写真入りで掲載した．

調査の結果，村内でバリアフリー対応のサービスを行っている施設は多く，その内訳は表４のとおりであった．

表３　バリアフリー対応項目

	入場・観覧料金	入場料金または観覧料金が必要です
	駐車場	駐車場があります
	障がい者用駐車場	障がい者用駐車場があります
	点字ブロック	点字ブロックが敷設されています
	点字案内板	点字案内板があります
	車椅子貸出可	車椅子の貸出があります
	補助犬OK	補助犬と一緒に利用できます
	車椅子通行可	車椅子が通行可能な出入口です
	トイレ	トイレがあります
	車椅子トイレ	車椅子対応トイレがあります
	トイレ呼出ボタン	トイレに呼出ボタンが設置されています
	おむつ交換台	おむつ交換台があります
	手すり付きトイレ	手すり付きトイレがあります
	洋式トイレ	洋式便器があります
	和式トイレ	和式便器があります

表４　バリアフリー対応施設の数

バリアフリー対応項目	対応施設数
有料施設	11
駐車場	49
障がい者用駐車場	5
点字ブロック	4
車椅子貸出可	10
補助犬 OK	23
車椅子対応トイレ	28
おむつ交換台	21
洋式トイレ	51
和式トイレ	38

5.　あすかナビによる情報提供

バリアフリー実態調査の結果は，現地を巡る観光客がスマートフォンや携帯電話から情報検索が可能なサービス「あすかナビ」システムに統合した．明日香ナビは，観光客が現在位置をスマートフォンのGPS等を使って測位し，そこから目的施設までの最適な歩行経路を案内する．ルート検索では健常者（すべてのルートを利用できる歩行者）と，段差や急勾配を避ける必要がある車いす・自転車の別に適切な経路を検索して案内する．また各施設におけるバリアフリー対応項目をアイコンで表示するため，障がいのある方々が明日香を巡る際に必要な情報を提供してくれる．

図 19　あすかナビによる案内

本システムは2012年10月から運用を開始し，半年間で約１万人に利用された．利用者へのアンケート調査の評価はおおむね良好で，今後も（財）明日香村地域振興公社により運営が継続される予定である．

（http://www.kitemite.me/asuka）

本システムの技術的な詳細については，森本哲郎等による「移動者支援のための観光アプリあすかナビの開発」に詳しい．またシステムの特徴や運営の詳細については，市岡隆等による「歴史的な観光地における歩行者移動支援と交通施策に関する考察」に詳しい．

6. 明日香村の観光活性化への提言

以上に紹介した明日香村観光実態調査の結果や，バリアフリー実態調査，あすかナビの運営と利用者アンケートの結果から，明日香村の観光活性化のための提言をまとめた．この提言は明日香村を対象にしたものであるが，中高年観光客の増加が見込まれる類似の観光地にもあてはまるところが多いと考え，この結果を要約し，以下に紹介する．

(1) 施設整備型から自然景観・街並み整備型へ

明日香村では，明日香村整備基本方針等を定め，この方針に従って各種の取り組みを進めてきた．これまでの取り組みによって，村内の道路や水路，国営公園などの基盤施設の整備が進んだ．明日香村は観光客にとっても村民にとっても，便利で，また暮らしやすい地域になった．また万葉文化館や飛鳥歴史公園館，高松塚壁画館などの多くの観光拠点となる施設の整備も進められた．

しかし今回の調査結果は，「明日香観光客の中心は中高年リピーターであり，彼らは施設への来訪頻度は低く，農村風景や緑豊かな景観を楽しむために明日香に来る」という結果を示している．リピーターが求めるのは，整備されたインフラや便利な観光施設よりも「明日香らしさ」であった．集落や古民家の修景保存，緑豊かな自然景観の保護，棚田や農村風景の維持保全など，地域全体が醸し出す明日香らしさを守り育てていく取り組みが観光客の増加につながることを調査結果は示している．

(2) 中高年観光客への対応方針

明日香村観光客の中心となる層は，遠足や修学旅行生などの若年層ではなく中高年層である．明日香村観光における地域内の移動手段は，徒歩とレンタサイクルが中心であるが，このレンタサイクルですら60代，70代の高齢者には使いづらい移動手段となっている．村内には循環バス（かめバス）が走行しているが，運行頻度は30分から１時間に１本程度となっており，路線形態も複雑な周回ルートであるため，目的地への移動に長時間を要することも多い．

村内の路線バスはリピーターのニーズを満たすサービスとは言えず，今後さらに増加する中高年観光客が使いやすい公共交通サービスの拡充が望まれる．

またあすかナビで取り組んでいるようなバリアフリー情報の提供や高齢者に使いやすい施設整備についても，利用者の意見を取り入れながら一層の拡充が望まれるところである．

(3) リピーターを念頭に置いた観光施策

拠点施設の整備から，自然景観や街並み整備型へと観光施策の重点を移していくことがリピーターのニーズに合致することは（1）で述べた．

拠点型施設における展示等においても，四季折々の多彩なイベントの実施など，リピーターにとって魅力ある催事設計が求められる．初めて明日香に来訪した観光客にとっては，学習型施設は目的施設となる．しかし常設展示だけではリピーターの再訪は期待できない．リピーターにとって魅力ある催事設定に取り組む必要があろう．

(4) 周遊，長時間滞在ニーズへの対応 ～「食」と共通入場券～

アンケート結果にも示されているとおり，観光来訪者ニーズの第１位は「食事・休憩ができる施設」であり，次いで「複数施設・寺社などの共通入場券」である．

現在の明日香村には食事を目的に来訪する観光客は少なく，明日香の看板となる「食」の開発が必要である．

またリピーターのニーズに応え，地域での滞在時間を増やし，消費拡大につながる施策として共通入場券の導入は効果的である．

共通入場券・共通利用券は国内外で多くの事例がある．共通券の導入にあたっては，地域の施設が連携して来訪者のニーズに応えるために，地域の協力・連携組織を構築する必要がある．地域内の複数の施設が連携することで新たな魅力が生み出される．

図20はベトナムの世界遺産であるホイアンの街の共通入場券である．観光施設を博物館（４），古民家（４），会館（３），民族工芸施設（２），寺院・観光施設（２）の５つに分類し，各分類項目の施設から好みの施設を選んで入場できる．リピータにとっても複数回の購入動機を与える共通入場券となっている．

図 20　ベトナム・ホイアンの共通入場券

(5)　近郊からの来訪者への生鮮食品の提供

明日香村への観光客の多くが奈良・大阪といった近郊地からの来訪であり，さらにこの半数以上は自家用車を利用している．近郊からのリピーターは一次産品を好んで購入するため，特産品開発が観光振興に及ぼす効果は大きい[6]．午後に滞在する日帰り観光客は，夕飯を意識して生鮮三品（肉・魚・野菜果物）を購入する傾向が強いと考えられる．図９が示すように明日香村の出発時間が15時～17時に集中しているということから見ても，農産品の強化は明日香村観光振興の重要な施策となろう．

(6)　住民意識の発揚と地域全体での取り組みへ

明日香村は豊富な観光資源に恵まれ，明日香法に基づく基盤整備事業も幅広く展開されてきたため，村民の観光活性化に関する危機感が低いと言われている．飲食店や土産物店の営業時間は午前9時から午後17時と短く，平日は閉店している飲食店も多い．

少なくとも春・秋の観光シーズンは，観光活性化期間に指定して地域全体で営業時間の延長に取り組むなど，来訪者ニーズに適合するサービスを行う必要があろう．

また明日香の原風景を維持する，あるいは取り戻すためには，地域住民が一体となって明日香の魅力を高めるための活動に取り組むことが大切である．

庭先や門前の花，地域で守る自然，建造物の維持など，来訪者のニーズを見据えたサービスなど，「もてなし」と「しつらえ」のある地域づくりは，観光客にとって魅力的であるだけではなく，そこに住む村民にとっても快適で，地域への誇りと愛着を生む原動力となる．

茶道の「もてなし」[7]とは来客に心地よさを提供するだけではなく，自分も楽しむことだ言われる．観光活性化への取り組みは，観光客だけを意識した取り組みではなく，村民自らが住みよい地域を作る活動の延長にある．自分たちの生活する地域を，外からの視点で再評価し，魅力を再発見し，改善していく．

観光振興を観光事業関係者だけの取組みとして捉えるのではなく，魅力ある地域づくりのための地域住民の共通の目標であると位置づけて，明日香村全体で取り組んでいくことが大切だと考える．

7.　おわりに

本論文では，高齢化社会における観光活性化をテーマとして，明日香村における実態調査結果からの考察と明日香村への提言を紹介した．

明日香村での観光実態調査ならびにバリアフリー実態調査は，当初は高齢者に視点を置いたものではなかった．しかし調査を進めるにつれ，利用者の過半数が50歳以上の中高年観光客であることが明らとなり，高齢者はバリアフリーの対象として想定する移動制約者，マイノリティではなく，来訪者のマジョリティであることに，今更ながらに気づかされる結果となった．

団塊の世代が定年を迎え始める今，一昔前の高齢者とは違って，行動力ある高齢者が観光客の中心となってくる．太田は著書，団塊ツアー[8]の中で，「団塊世代一人あたり退職金と年金資産を併せた金融資産は2573万円に及びこれをどのように消費させるかがマーケットを考える際の関心事になる」と指摘する．団塊世代は歳をとっても最先端のものに触れていたいという欲求が強く，アクティブで本物志向，こだわりを持ちICTにも強い．

今後さらに少子高齢化は進み，定住人口の増加に期待することは難しい．交流人口の拡大による地域経済の再生と活性化を目指して，観光振興に取り組む地域はますます増加するだろう．高齢者が使いやすい施設，それらを案内する情報サービスの重要性[9]は言うまでもないが，それに加えて，本物志向でこだわりを持つ時間消費型観光客の増加に対応できる，魅力ある地域づくりー特色ある産業，農業体験，環境共生，郷土食，歴史的景観の整備，などー[10]を進めていく必要がある．

参考文献

1) 国土交通省観光庁，観光立国推進計画，2012 年 3 月.
2) 奈良市観光交流推進計画（2010 奈良市），大阪府外客来訪促進計画（2005 大阪府），京都市，未来・京都観光振興計画 2010+5（2010 京都市），鎌倉市，第二期鎌倉市観光基本計画（2007 鎌倉市）など
3) 奈良県，明日香村における生活環境及び産業基盤の整備等に関する計画（2010）
4) 奈良県明日香村，明日香村観光実態調査結果報告書，2013 年 2 月
5) 明日香まるごと博物館づくり推進協議会，平成 24 年度（奈良県明日香村地区）ユニバーサル社会に対応した歩行者移動支援に関する現地事業報告書，2013 年 2 月
6) 大藪多可志・中島恵，観光と地域活性化，2011，株式会社三恵社
7) 岡本浩一，茶道を深める，2008，淡交社
8) 太田正美，団塊ツアー，2009，東京図書出版会
9) 秋山哲男・松原悟朗他，観光のユニバーサルデザイン　歴史都市と世界遺産のバリアフリー，2010，学芸出版社
10) 佐々木一成，観光振興と魅力あるまちづくり　地域ツーリズムの展望，2011，学芸出版社

(2013. 5. 6受付)

Consideration of The Regional Activation through Tourism for the Aging Society.

Junji NISHIDA, Masahiro FUKUI, Masaaki GOTO and Kiyoshi KOBAYASHI